

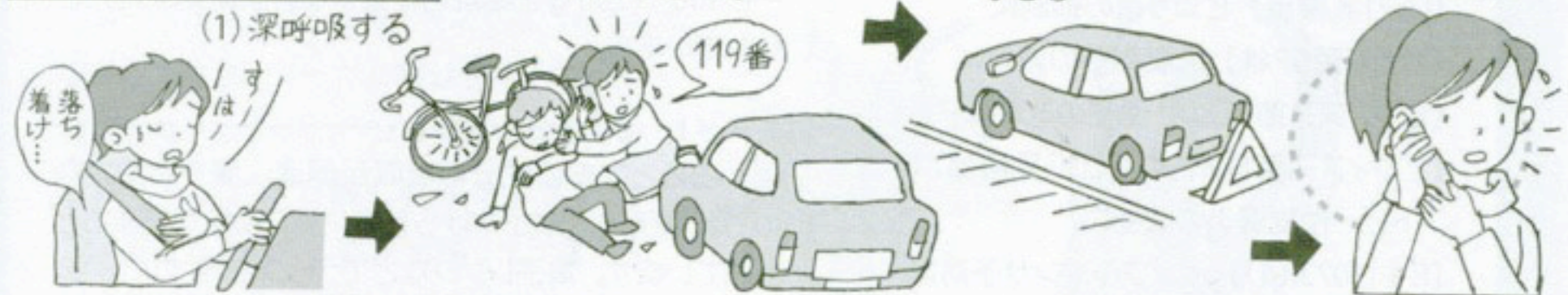


プロフィール ● おおた てつや

レーシングドライバー、自動車評論家。1959年、群馬県生まれ。93年からル・マン24時間耐久レースにフェラーリで出場。レース中の事故により重傷を負ったが、リハビリ生活乗り越えてサーキットに復帰。チャレンジする素晴らしさを伝える社会貢献活動「NPO法人KEEP ON RACING」の代表を務める。「太田哲也とオヤジレーサーズ」「太田哲也スポーツライビングスクール」を率いて、モータースポーツ文化に貢献。著書に、「クラッシュ」「リバース」(幻冬舎)など多数。

<http://www.keep-on-racing.com>

## もし事故を起こしたら…



一般の人に運転技術や車の魅力を広めるために、レーシングドライバーを続けながら自動車評論の活動を行なう太田哲也さんが、運転上の見落としがちな盲点と、誰でもできる安全運転のコツを分かりやすく伝えていきます。

連載の最初のころ、「運転姿勢編」について二十歳の女性読者から、「運転姿勢が大事だと知りませんでした。免許を取ったら気をつけて安全運転を心掛けようと思います」という絵入りのうれしいハガキをいただいた。もう免許は取れて運転をしているだろうか。早いもので今回が最終回となる。今回は六十二歳の女性と八十二歳の男性からメッセージをいただいた。お二人とも車の運転をしている。「鈍くなる反応を気にしながら、意識をしっかりと持って走ろうと思っています」とあった。含蓄のある言葉である。こういう人は事故を起こさないタイプだと思う。

運転は、想像力や知識欲があって、向上心が高い人ほどうまくなる。つ

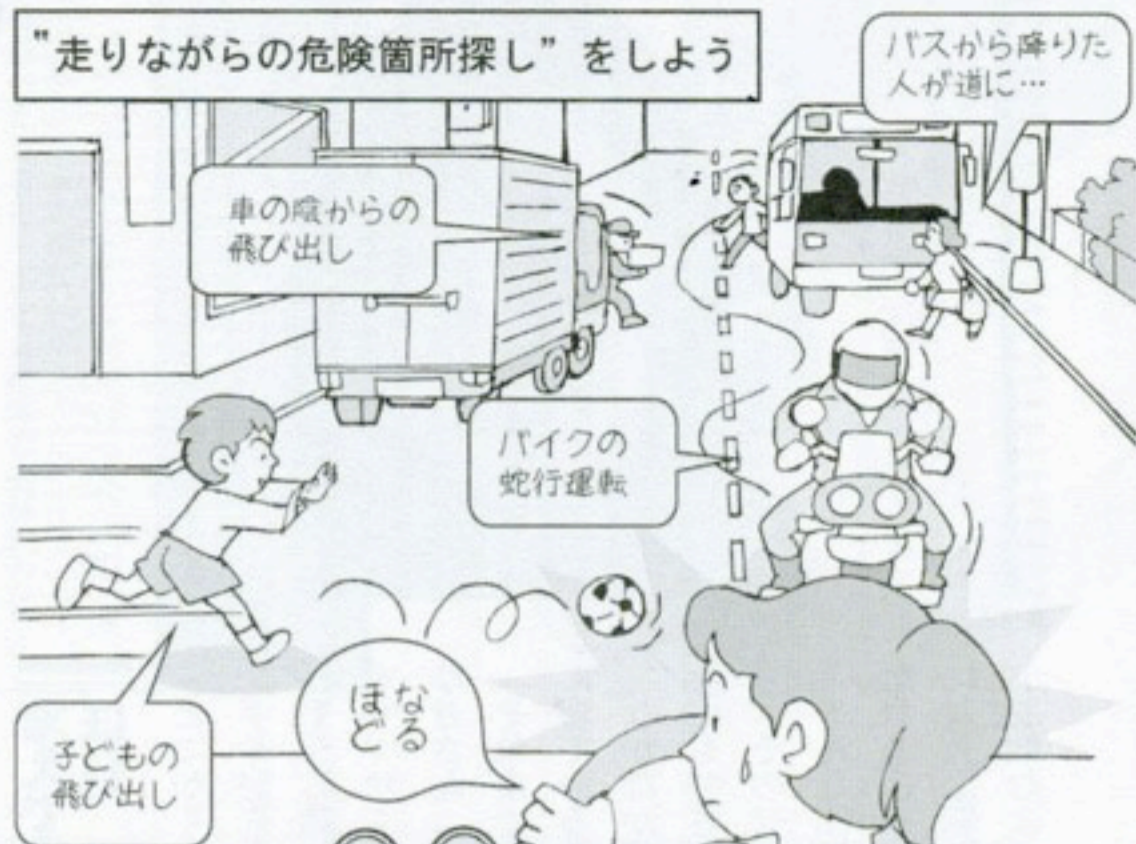
まり意識が大切だ。逆に事故を起こしてしまう人は自分が事故を起こすことをイメージしない(できない)、事故により引き起こされる結果を想像しない(できない)。意識が低いから、居眠りしたり注意が散漫になったりしてしまう。

事故に遭わないように、意識を高めてほしい。

とはいえ起きてしまったとき、その対処として何から始めたらよいのだろうか？ まずは動揺しているはずだから深呼吸をしよう。「落ち着け」と自分に声を掛けてから対応を始めた。最優先は負傷者の救護だ。でもぐったりしていたらむやみに動かさない方がよいケースもある。二次衝突事故を防ぐため、後続車に注意を促すよう表示板や発煙筒を使う。車はできるだけ安全な場所に停める。そして救急隊か警察に連絡、もし周りに人がいたら声をかけて手伝ってもらおう。

【交通法規はあなたの身の安全のために!】

車線変更時の方向指示器の点滅を怠るドライバーが目立ちます。後続車との間には十分な距離があるから問題ないと思うのですが、実際には後続車はそのたびに驚いてブレーキをかけているものです。他にも、右左折する地点に近づいたら、早めに方向指示器で後続車や対向車に知らせる、制限速度を守って運転するなど、相手の命を守るためだけではなく、運転するあなた自身の身の安全のためでもあるということを忘れてはなりません。



些細な事故であっても実況見分と保険会社への連絡は必要不可欠だ。相手に面倒がられても警察を呼んで事故証明をもらわないと、保険金が下りないケースが多いので、必ず呼んだ方がいい。それと事故は家を出たばかりの出会い頭で発生するケースが意外と多い。特にその日の運転のし始めは、まだ集中力が高まっていないので注意が必要だ。「家の前の通りはクルマが来ない」と考えるのではなく、「今まではたまたま来なかった。今日こそは来るかも」という逆転の発想が大事だ。最近では高速道路に人が入ってきたり、一般道でとんでもない行動をする人がいる。そのことを念頭に置いて走ることも必要となるだろう。連載は今回で終わりだが、今後は皆さんが自分の頭で安全運転の方法を考えていただきたい。そのためのヒントを伝授しよう。それは「走り

ながらの危険箇所探し!」だ。「あそこに停まっているトラックの脇から人が飛び出てくるかもしれないな」とか、「あの自転車はこちらに気づいていないかも」などと危険な箇所を探しながら走るのだ。そうやって走ると、とくに市街地だとチェックポイントが多くて速度が出せなくなるはずだ。速度を落とせば安全が確保されるのではない。安全に走ろうとするとそんなに速度が出せなくなる。そう僕は考えている。危険箇所探しをやって意識を働かせると、集中力はもちろん高まるし、運転も楽しくなる。ミスや事故は、スピードを出しているときよりも、たとえ制限速度内であっても漫然と走っているときに起こりがちだ。ぜひ、できるだけ多くの危険箇所を探して、皆さん独自の「安全運転指南」を編み出していただきたい。ではサヨナラ。